



GRIDMAN
UNIVERSE



GRIDMAN
UNIVERSE

TAKARA
TOMY



ダイアクロン / グリッドマンユニバース 01

超神合体バトルスグリッドマン
BATTLES GRIDMAN

© TOMY © 円谷プロ



GRIDMAN UNIVERSE



※本パンフレットで使用されている写真およびイラストはイメージです。実際の商品とは異なる場合がございますので、予めご了承ください。

超神合体バトルスグリッドマン BATTLES GRIDMAN

GRIDMAN (PrimalFighter)

グリッドマン (PrimalFighter)

邪悪なエネルギー生命体=次元怪獣の出現に伴う多次元宇宙交差現象の副次的効果によってダイアクロンの存在する次元世界で実体化したハイパーエージェント。次元怪獣と互角に戦う為、特殊な戦法に則したサイズで実体化する。



BATTLE HANGER

強化合体マシン/アシストウェポン：バトルハンガー

202X年代中期に開発中のダイアクロンメカのデータをベースにグリッドマンを強化するアシストウェポンとして再構築された大型飛行戦闘マシン。機首には小型戦闘機ポレットファイターが接続、機体後部はグリッドマン用の強化アーマーで構成されている。



BATTLES GRIDMAN : A MODE

超神合体バトルスグリッドマン：Aモード (飛行/砲撃機動モード)

バトルハンガーと合体したグリッドマンの強化形態。飛行・砲撃による戦闘機動を行うアタックモード。



GRAND OMEGACROSS

強化鎧装機動・グランドオメガクロス

バトルハンガーを構成する各部強化アーマーでグリッドマンを強化形態・バトルスグリッドマンにパワーアップする為の装着合体プロセス。



BATTLES GRIDMAN : FULL ATTACK MODE

超神合体バトルスグリッドマン：フルアタックモード



ウイング/キャノンユニットを展開する事で武装全開状態のフルアタックモードとなる。

POWER VISE

パワーバイス



パワーバイスを駆使したアクティブな接近格闘機動を行うバトルモード。

THUNDER CRASH CALIBER

サンダークラッシュキャリバー



グリッドマンの必殺武器として構築されたアシストウェポン。ソード部とシールド部に分離可能。

BATTLES GRIDMAN : B MODE

超神合体バトルスグリッドマン：Bモード (近接格闘機動モード)



背部のウイング/キャノンユニットをバジ化したグリッドマンの強化形態。

BATTLE HANGER : RIDE ATTACK MODE

バトルハンガー：ライドアタックモード



バトルハンガーとの連携戦闘モード。

COMBAT SUPPORT AIRCRAFT

戦闘支援機



ポレットファイターとウイング/キャノンユニットが合体した形態。

BULLET FIGHTER

小型戦闘機：ポレットファイター



ダイアクロン隊員が操縦する小型戦闘機。バトルハンガーの機首としても機能する。

CONNECTION WITH ANOTHER PRODUCT

別製品との接続

バトルスグリッドマン背部のウイング/キャノンユニットの接続ジョイント部に別売のダイアクロンアイテム・ヴァースライザーシリーズのユニットを接続合体可能。

ヴァースライザー1号パーツとヴァースライザー2号パーツとの接続



ダイアバトルス V2 パーツとの接続

ポレットファイターは別売のダイアクロンアイテム、バトルス02、コスモバトルス02と接続合体可能。



ダイアクロン/グリッドマンユニバース 01 超神合体バトルスグリッドマン 以外は製品に含まれていません。

超神合体バトルスグリッドマン合体・変形システム



超神合体バトルスグリッドマン
BATTLES GRIDMAN

合体



合体



アシストウエポン:バトルハンガー
ASSIST WEAPON: BATTLE HANGER

合体



戦闘支援機
COMBAT SUPPORT AIRCRAFT

合体



ボレットファイター
BULLET FIGHTER



ダイアクロン隊員
DIA-NAUTS

搭乗

グリッドマン(PrimalFighter)
GRIDMAN(PrimalFighter)



サンダーソード

サンダーシールド

サンダークラッシュキャリバー
THUNDER CRASH CALIBER

Aモード(飛行/砲撃機動モード)

A MODE

フルアタックモード

FULL ATTACK MODE

Bモード(近接格闘機動モード)

B MODE

ストーリー原案：高谷 元基(タカトミー) 脚色・文：北嶋 博明 企画協力：雨宮 哲
挿絵／原画：坂本 勝 仕上げ：武田仁基 特効撮影：齋藤陸(グラフィニカ) ウェザリング：安部葵(第3話挿絵)
監修協力：円谷プロダクション TRIGGER

ダイアクロン vs. グリッドマン

第1話

遭・遇

その名はグリッドマン!

202X年代の中頃——長きに渡るワルダー星人の侵略攻撃が途絶え、地球・マクロゾーン連邦委員会は第一次・対ワルダー防衛戦の暫定終結を宣言、地球には平和が訪れていた。

そしてここ、月面・セレンゾーンのダイアクロン科学研究基地では——システム開発用ダイアテクターに身を包んだ女性隊員が、他には誰もいない深夜の研究室で一人、黙々と研究を続けていた。

彼女の名はヒカリ・カイザキ。

弱冠18歳にして研究主任の座を掴み取った才媛である。

ヒカリはかつて、第一次ワルダー防衛戦の渦中において、幼い弟を亡くし、悲しみの底に落とされた。

たとえ今は平和でも、いつまたワルダーのような侵略者が現れないとも限らない。

ならば、自分も地球防衛の一端を担おう——自分のような悲しい思いを、もう誰にも味わわせないために。

そう心に誓ったヒカリは、血の滲むような努力と猛勉強の末に、ダイアクロン隊への入隊を果たしたのであった。

ダイアクロンメカの次世代型操縦システムの要となる戦闘用対話型人工知能プログラム、通称「BIG-AI」——その基礎開発にヒカリたちは取り組んでいた。

BIG-AIによって、パイロットの意識とダイアクロンメカの制御プログラムをシンクロさせ、より効率的な機体運用を図るためである。

だが、最適なシンクロ状態を構築するには、いかなる方法を選択するのがベストなのか？

その最重要課題に関して、ヒカリたちは未だ模索中であつた。

そんなヒカリの精神は今、実験用ダイアテクターに装備されたリンクシステムが生み出した、黄金の光に包まれたサイバー空間にダイブしていた。

開発の第一段階として、BIG-AIに人間の思考パターンを学ばせているのだ。

だが、突然、システムのセキュリティが起動し、ヒカリの精神はサイバー空間から強制的にログアウトされ、現実世界へと引き戻された。

「なんだ？ 何が起った？」

戸惑うヒカリをよそに、基地の全域には緊急アラートが鳴り響いていた。

さらに、モニターの一つには外部監視カメラが捉えた基地上空の光景が映し出されており、それを見るなりヒカリは愕然とした。

「!」

なんと、基地の上空には、かつてワルダー軍団が奇襲攻撃に用いたタイム・ホールの如き次元の亀裂が生じていたのだ。

しかも、次の瞬間、亀裂の向こう側から、まるで弾き出されたかのように「巨大な何か」が飛び出してきていたではないか!

「あれは……巨人!？」

そう、驚くヒカリの目に飛び込んできたのは——赤を基調とした体躯に、西洋の甲冑を思わせるような鎧を身に纏い、全身を眩い光に包まれた、全長70mはあろうかという、超巨大なヒューマノイドの姿であった。

「! まさか……ワルダー!？」

けれど、その真偽を確かめる時間はなかった。

勢いよく落下してきた巨大ヒューマノイドがグングン頭上に迫り——ズガン! 背中から科学研究基地に倒れ込んだ衝撃で、建物が崩壊し始めたのだ。

「危ないッ!」

降り注ぐ瓦礫からBIG-AIの筐体を守るべく、ヒカリはダイアテクターのパワーアシスト機能を全開にして、咄嗟に瓦礫を振り払った。

だが、その直後、ひときわ大きな瓦礫が不意にのしかかり、ヒカリは押し潰されてしまった。

「うっ……!」

意識が遠のいていく中、ヒカリは一瞬、倒れている巨大ヒューマノイドと視線が合ったが、光を放つその双眸からは、不思議と敵意を感じ取れなかった。

そしてヒカリは、そのまま意識を失っていった——。

「ダイアクロン月面防衛隊、スクランブル! 隊員は戦闘態勢に入れ!」



月面・セレンゾーンの司令官は、出現した際の状況と、科学研究基地の破壊という事象から、巨大ヒューマノイドをワルダーの再襲来と判断し、ただちに精鋭部隊を出動させた。

「こちらダイアファイター01! ワルダーを捕捉!」

ヨロヨロと立ち上がった巨大ヒューマノイドのもとへ、いち早く三機の戦闘機編隊が飛来し、サーチを開始した。

「高エネルギー反応を検知! 質量は……計測できず! ある種のエネルギー生命体だと思われます!」

「すると、生きたビームが科学研究基地を直撃したって寸法か!」

「全機、攻撃開始!」

三機のダイアファイター編隊はフォーメーションを組んで、巨大ヒューマノイドに対し、フリーゾミサイルを発射!

さらに、月面主力防衛チーム・バッファロー戦隊の編隊と攻撃型コスモローラーも続けて現場に到着し、攻撃に加わった。

だが、なぜか巨大ヒューマノイドは防戦一方で、反撃する素振りすら見せず、一步、また一步と後退するばかりだった。

しかも、その額のエネルギーランプとでも形容すべき器官は、エネルギーの消耗を警告するかのように点滅し始めていた。

それでもなお、基地の防衛を最優先とするダイアクロン隊は攻撃の手を緩めなかった。

バッファロー戦隊は合体して六機のバトルバッファロー-Mk.IIとなり——

コスモローラーからもパワードスーツ部隊が出撃!

各機はそれぞれ戦闘フォーメーションを組み、巨大ヒューマノイドを包囲するように攻撃を続けた。

すると、巨大ヒューマノイドの姿は次第におぼろげになっていき——やがて、まるで曇り空のごとく、掻き消えてしまった。

けれど、攻撃に参加したダイアクロン隊員たちは誰一人として気づかなかつたが——巨大ヒューマノイドは光の粒子と化して、科学研究基地の残骸へ——意識を失ったヒカリの元へと向かっていた——。

それと時を前後して、ヒカリは夢を見ていた。
 弟と、戦火の中を逃げ回る夢を。
 ヒカリと弟は、いつしか救世主を——希望の光に満ちた夢のヒーロー、名付けて《シルバークラティオン》を心の中に思い描くようになっていた。
 そしてヒカリは、弟のためにシルバークラティオンの人形を作ってあげた。
 その胸の中央部分に、希望のシンボルとして、惑星開発隊長だった父からエウロパ探査土産としてもらった《緑色発光水晶》を組み込んで。
 そんなシルバークラティオンの人形を、弟はお守りのように肌身離さず持ち歩いていた。
 きっとヒーローが——シルバークラティオンが助けに来てくれるに違いないと信じて。
 だが、その願いが叶うことはなく——緑色の水晶の欠片だけが弟の形見として残った。
 ヒーローなんていない。だったら、自分がヒーローになるしかない。
 そう誓った日の光景の中で——ヒカリは夢から覚めた。

けれど、そこは現実の世界ではなかった。
 再び、黄金の光に包まれたサイバースペースに佇んでいたのだ。
 どうやら、瓦礫に押し潰された際にダイアテクターのリンクシステムが作動し、意識を失うのと同時に、サイバースペースへダイブしたらしい。
 しかも、あろうことか、その眼前には——意識を失う直前に見た、あの巨人が、なぜか等身大の姿で立っているではないか！
 なぜここに？ ひょっとして、これは夢の続きなのか？
 すると、困惑するヒカリをよそに、巨人——だった謎の存在が言葉を発してきた。
 「私はハイパーエージェント、グリッドマン。怪獣と化したワルダー星が地球へ向かっている。君の協力を要請する！
 グリッドマン？ ハイパーエージェント？ それに、ワルダー星が怪獣化？ ヒカリはますます混乱し、目を白黒させるばかりだった。
 そう、ヒカリたちダイアクロン隊は知る由もないが、《オペレーション ラグナロク》の結果、ワルダー星はフリーゾーンエネルギーの暴走による重力崩壊を起こしていたのだ！
 そして、自らをグリッドマンと名乗る存在は、これまでの経緯を語り始めた——。

重力崩壊したワルダー星は本来、ブラックホール化するはずだったが、その際に生み出された超波動フリーゾーン量子とワルダー星人たちの残留思念が結びついて、ブラックホールの属性を持った恐るべきエネルギー生命体——すなわち「怪獣」へと変貌した。
 ほどなく怪獣は、フリーゾーンエネルギーの強奪という、ワルダー星人が果たせなかった目的を果たすため、その自在に次元を跳躍できる能力を使い、地球に向かって次元ワープを開始した。
 しかも、それに伴って発生する次元震動によって、多元宇宙同士の交錯という、未曾有の危機的現象が起こり始めた。
 そこで、事態を收拾すべく、ハイパーワールドから特命を帯びてやってきたグリッドマンは怪獣の討伐に向かったが——怪獣は、何度ダメージを負わせても、その体の根源を成す超波動フリーゾーン量子が発振する次元波動振動によって損傷箇所を再生し、瞬時に復活する桁外れの強敵だった。
 そしてグリッドマンは、異次元空間に於ける、長く過酷な戦闘で極限にまでパワーを消耗し——さらに、次元を突き破るほどの凄まじい一撃を食らって、ヒカリのいる月面へ弾き出されてしまったのだ——と。

「君を危険な目に遭わせてしまい、すまなかった……しかし、私はこの世界では、実体のないエネルギーにすぎない。だから、君の助けが必要だ。君の肉体と、平和を愛する優しい心が……その心の力が！」
 科学研究基地に倒れ込み、ヒカリと視線が合った時——グリッドマンには届いたのだという。ヒカリの瞳の奥できらめく、燃えるような勇気と情熱、そして、平和を愛する優しい心が！
 怪獣がもたらした多元宇宙交差現象の副次的効果により、グリッドマンはヒカリたちの世界に現れたが、エネルギー体である彼が完全に実体化するにはパートナーが必要だった。
 だからこそヒカリを選び——彼女のダイアテクターに、その身を預けたのだ。
 そして、いつの間にか、ヒカリの左手首には、プレスレット型のアイテムが装着されていた。
 「!? これは……」
 「それはアクセプター。君と私を繋ぐものだ。いつも持っていてくれ」
 と、その時、サイバースペースに「カイザキ隊員！ カイザキ隊員！」と呼びかける声が響き渡り——ヒカリは現実の世界へと引き戻された。
 駆けつけた救急班によって、ヒカリは瓦礫の下から救い出されたのだ。
 そんなヒカリの左手首には、サイバースペースの時と同じく、アクセプターが装着されていた。
 やはり、今しがたの出来事は夢ではなかったのだ。

けれど、事態を頭の中で整理している暇はなかった。
 「メトラゾーンに巨大怪獣が出現！ 繰り返す！ メトラゾーンに巨大怪獣が出現！」
 「!!」
 基地内に響き渡るアナウンスを耳にして、ヒカリの全身に戦慄が走った。
 怪獣が——グリッドマンの言っていた通り、巨大な怪獣が地球に出現したというのだ！

(つづく)

第2話

災・厄

その名は ジャイガンター!

突如、出現した巨大怪獣迎撃のため、ダイアクロン隊が出動した——との通信を最後に、地球との連絡は途絶えた。
 巨大ヒューマノイドの出現に続く異常事態の発生に、ここ月面・セレンゾーンでは第一級警戒態勢が敷かれた。

そんな中、ヒカリは基地のスペースドックに駐機している星間兆速連絡機ダイアシャトルのcockpitに乗り込んでいた。
 「この世界に於いて、私の力だけで怪獣を倒すのは困難だ。ランドマスターの協力を仰ぎたい」
 ダイアテクターのデバイスを介し、グリッドマンはあらかじめヒカリに協力を要請していた。
 パワーが回復し、ヒカリの体を借りて実体化したとしても、怪獣に対する勝算は低い。
 使命を果たすためには、自分をサポートし、時には自分と合体して強化形態にしてくれる武器やメカ——アシストウェポンが何としても必要だ。
 さらに、怪獣の再生能力の源である次元波動振動を打ち消す方法も見出さなくてはならない。
 ダイアテクター内のデータから、地球・マクロゾーンの守護神とでもいえるべき中枢電子頭脳《ランドマスター》の存在を知ったグリッドマンは、ランドマスターの知恵と力を借りればアシストウェポンの構築と、次元波動振動の攻略が可能かもしれない——と判断したのだ。
 たとえ巨大怪獣が相手だろうと、ダイアクロン隊ならばきっと倒せるはず——ヒカリはそう信じていた。
 だけど、もしも……もしも倒せなかったら——そんな不安もよぎり、ヒカリはグリッドマンの頼みを聞き入れ、地球へ向かう事にしたのであった。
 だが、その時、スペースドックの管制官がヒカリに呼びかけてきた。
 「カイザキ隊員！ 非常事態につき、地球への渡航は禁止されています！ 許可なく発進は出来ません！」
 「始末書なら後で書く!!」
 そう言うや、ヒカリはダイアシャトルを高速航行モードのダイアウイングへとチェンジして飛び立ち、一路、地球を目指した——。

今から数時間前——地球のメトラゾーン・東京シティの上空に突然、次元の亀裂が生じ、その向こうから不気味な咆哮と共に、全長100mの威容を誇る巨大な生物が姿を現した。
 全身を硬く黒光りする外皮に覆われ、その随所に青く光る目玉の如き球体を散りばめ、恐竜の様に太くて遅い脚と尻尾、不気味な昆虫を思わせる両腕、鋭い牙の生えた口、そして頭部には左右に広がる2本の角を有した、見るからにおどろおどろしくグロテスクな姿をした巨大怪獣が！
 巨大怪獣は自らがもたらした次元交差現象の副次的効果により、ヒカリたちの世界で実体化したのだ。
 そして、地上に降り立った巨大怪獣はフリーゾーンエネルギーを求めて、街を破壊しながら進撃を開始し——体の周囲に幾つもの次元ゲートを展開させて、地下に張り巡らされたパイプラインを自らの元へと転送し、フリーゾーンエネルギーを貪り食っていった。

これを阻止するため、ただちにダイアクロン首都防衛隊が出撃！
 逃げ惑う人々をシェルターへ避難させると、「次元巨獣ジャイガンター」と識別呼称した巨大怪獣に対し攻撃を開始した。
 大型戦闘指令基地・ロボットベース大隊を中心とした首都防衛マシンチームが、それぞれの武器を一斉に発射する。
 しかし、あろうことか、すべての攻撃が——無敵と謳われたロボットベースのフリーゾーンビームキャノンでさえも——ジャイガンターが体の周囲に張り巡らせた次元シールドによって無効化されてしまった。

しかもそればかりか、各武器に用いられているフリーゾンエネルギーまでもがことごとく、ジャイガンターに吸収されてしまったのではないか!

驚愕するダイアロン隊に対し、今度はジャイガンターが反撃を開始した。その全身から放たれる次元粉碎ウェーブによってダイアロンメカの各機は機能停止に陥り、為す術を失くしたダイアロン首都防衛隊は態勢を立て直しを余儀なくされる。

この事態に、メトラゾーンを司る巨大な中枢電子頭脳「ランドマスター」もまた、潜行防御モードで地下1000mにあるシェルターへと緊急避難せざるを得なかった。

立ちはだかる者のいなくなったジャイガンターは、我が物顔で東京シティを蹂躪し、フリーゾンエネルギーを食らい続けた。それに伴い、東京シティの都市機能は完全にマヒし、コンピューターのネットワークシステムも遮断され——街は廃墟と化した。フリーゾンエネルギーを食い尽くしたジャイガンターは、静まり返った東京シティをあとにし、西南西の方角へと進路を取り始めた。その体に寄生していた、人間大の小型怪獣を何十匹も産み落としながら——。

一方、ヒカリの操縦するダイアウイングは地球の大気圏へ突入し、東京シティを目指して降下していた。

と、その時——眼下から、黒い雲のような塊が、こちらへ向かって急接近してきた。

が、それは雲ではなく——ジャイガンターに寄生していた小型怪獣の群れだった!

昆虫の様な手足と羽を生やした、直径2mはあろうかという大きな目玉——としか形容しようのない姿形をした「次元寄生獣」の群れが、ダイアウイングの動力源であるフリーゾンエネルギーを狙って襲い掛かってきたのだ。

「! なんだ、コイツら!?!」

ヒカリは咄嗟に機体を回避させ、次元寄生獣の群れにミサイルを撃ち込んだ。

だが、それをものともせず、何十匹もの次元寄生獣がダイアウイングに群がり、その機体をたちまち貪り始めた。

「くっ!」

操縦不能に陥ったヒカリは、コックピットから緊急脱出して空に舞い、ダイアテクターに装備されたパラシュートを展開した。その視線の先では、次元寄生獣が群がったままのダイアウイングが黒煙を上げながら墜落していき——そのまま地表へ激突して、次元寄生獣ごと爆発四散した。

どうにか無事に地上へ着陸したヒカリだったが、目の前に広がる廃墟を見て、愕然とするしかなかった。

「これが……東京シティ……」

と、それも束の間、遠くから激しい銃撃音が聞こえてきた。

そちらの方角へ目をやると——ダイアロンのパワードスーツ部隊が次元寄生獣の群れと交戦中だった。

逃げ遅れた人々の救出任務にあっているのだ。

すかさずヒカリはダイアテクターのデバイスを介し、グリッドマンに呼びかけた。

「グリッドマン! あなたの力を貸して! あの怪物どもを踏みつぶして!」

だが、グリッドマンからは意外な言葉が返ってきた。

「すまない……まだパワーが十分に回復していない。今、無理に実体化すれば、君の体に危険が及んでしまう」

「!」

期待を裏切られたヒカリは、落胆を隠せなかった。

やっぱりヒーローなんていないんだ……だったら……自分でやるしかない!

廃墟の一角に、ジャイガンターとの戦いで横転し、瓦礫に埋もれてしまったとおぼしきダイアロン隊の輸送車を目に留めると、ヒカリはそちらへ向かって走り出した。

そして、輸送車に搭載されたパワードスーツに乗り込むと、ダイアテクターをコネクして、フリーゾンジェネレーターを起動させた。

と、その時——ダイアテクターのデバイスからグリッドマンの声が聞こえた。

「感じる……パワーの流入を! これがフリーゾンエネルギーのパワーなのか!?! このパワーがあれば、完全ではないが実体化できるはずだ!」

「えっ……」

「戦闘コードを打ち込んでくれ。アクセスコードは——GRID SUIT!」

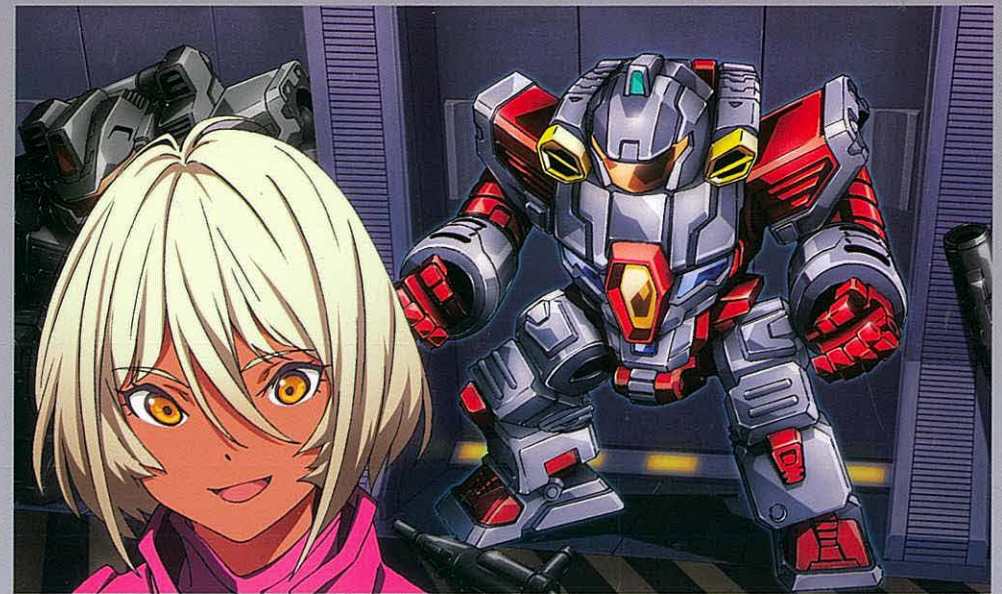
さっきは裏切られた気がしたけど……もう一度、グリッドマンを信じてみよう!

ヒカリは入力センサーが仕込まれているダイアテクターの指先を動かして、パワードスーツのキャノピーに投影されたバーチャルキーボードにコードを打ち込んだ。

「アクセスコード——GRID SUIT!」

次の瞬間、アクセプターが眩い光を放つと、その光の粒子に包まれたパワードスーツの装甲が見る見る形を変え——どこかグリッドマンを想起させる姿へと変貌していった。

「実体化……しているのか!?!」



「そうだ。君のパワードスーツと融合して!」

その言葉を裏付けるかのように、ヒカリは従来のパワードスーツとは全く異なる一体感と、湧き上がってくる力強さを感じた。

「行こう、ヒカリ!」

「ああ!」

ヒカリのパワードスーツ、いや、グリッドスーツはビームガンを手にし、背中にランチャーキャノンを装備すると、輸送車の壁を蹴破って、外へと飛び出した!

次元寄生獣の群れと交戦中のパワードスーツ部隊は苦戦を強いられていた。

ジャイガンターの時と同様に、次元寄生獣が展開する次元シールドによって、一切の攻撃が無効化されてしまっていたのだ。けれど、そのさなか——一方から放たれた一条のビームが次元シールドをものともせず、次元寄生獣の体を貫いた。

ビームは——こちらへ向かって駆けてくるグリッドスーツが放ったものだった。

パワードスーツに宿ったグリッドマンのエネルギーが、次元シールドを相殺したのである。

ランチャーキャノンを連射しながら近づいてきたグリッドスーツは、そのまま敵の群れの中に飛び込むと、手にしたビームガンで、次々と次元寄生獣を撃破していった。

その俊敏な動きは、ヒカリの優れた身体能力の為せる業だった。

ヒカリは高度な科学知識はもとより、ダイアロン隊員として一通りの戦闘技術や格闘術をも身につけていたのである。

それが今、グリッドマンの力と結びついて、本領を発揮しているのだ。

その活躍を、驚愕の面持ちで見つめるパワードスーツ部隊。

なおも次元寄生獣を撃破し続けるグリッドスーツ!

だが、次の瞬間——死角から襲い掛かって来た次元寄生獣が噴出した溶解液によって、ビームガンが溶かされてしまった。

「!」

「これを使うんだ、ヒカリ!」

グリッドスーツの右手に閃光がほとばしったかと思うと——刹那! その手には斧状の武器が握られていた。

グリッドマンのエネルギーによって実体化した「エミュレート・サンダーアックス」だ。

すかさずヒカリはエミュレート・サンダーアックスを縦横無尽に振るって、次々と次元寄生獣を粉碎していった。

そんな激闘の中、突然、グリッドスーツ内のデバイスからグリッドマンの眩く声が聞こえた。

「誰かが……誰かが私に呼びかけている……」

「えっ、何? こんな時に!」

「呼びかけてきているのだ……ランドマスターが!」

「えっ!?!」

驚きつつも、ヒカリは攻撃の手を緩めず——
エミュレート・サンダーアックスを振り回して電磁嵐を起こし——
ついに次元寄生獣の群れを一掃した。

「おかげで助かったよ。感謝する！ところで、君の所属は……」
「セレンゾーン科学研究基地所属、主任のヒカリ・カイザキです！」
「すると、そのパワードスーツは月から？」
パワードスーツ部隊の隊長は、グリッドスーツをまじまじと眺めながら尋ねてきた。
「えっ？ ええ……これは開発中の試作機で……特別な任務を与えられて地球に降りたのですが……まさか、いきなり実戦投入する事になるなんて……」
グリッドマンの事を説明しようにも、理解してもらうのは容易ではないだろう……そう思ったヒカリは、それらしい説明をしてその場を取り繕った。
「それより状況を……現在の状況を教えてください！」
ヒカリの問いに対し、パワードスーツ部隊の隊長は怪獣とダイアクロン隊との激闘や、その結果について伝えた。
「ランドマスターは？ ランドマスターとはコンタクトできないんですか？」
「ネットワークシステムも破壊状態……外部からランドマスターへのアクセスは一切、不可能だ」
「そんな……」
あまりの事態の深刻さに、ヒカリは途方に暮れるしかなかった。
そんな中、パワードスーツ部隊へ市民からの救援要請が入った。
「我々は行かねばならない。君はどうする？」
「私は……任務を続行します！」
「わかった。健闘を祈る！」
そう言い残して次の現場へと向かったパワードスーツ隊を見届けつつ、ヒカリは、なおもグリッドマンへ呼びかけ続けている電波の発信源をサーチし始めた。
ランドマスターからの電波は、グリッドスーツだからこそ辛うじて受信可能なレベルの微弱な物だった。
しかし、コンタクトを試みようにもランドマスターへのアクセスは不可能。
ならば直接、ランドマスターの元へ行くしかない！
入念なサーチの末、発信源を突き止めたヒカリは、キャノピーに投影した3Dマップ上で明滅している一点を見つめた。
「ここだ。行くぞ、グリッドマン！」
「ああ！」
そして、グリッドスーツは廃墟の中へと走り出した。
ランドマスターを目指して！

(つづく)

第3話

共・闘

その名は
ランドマスター！

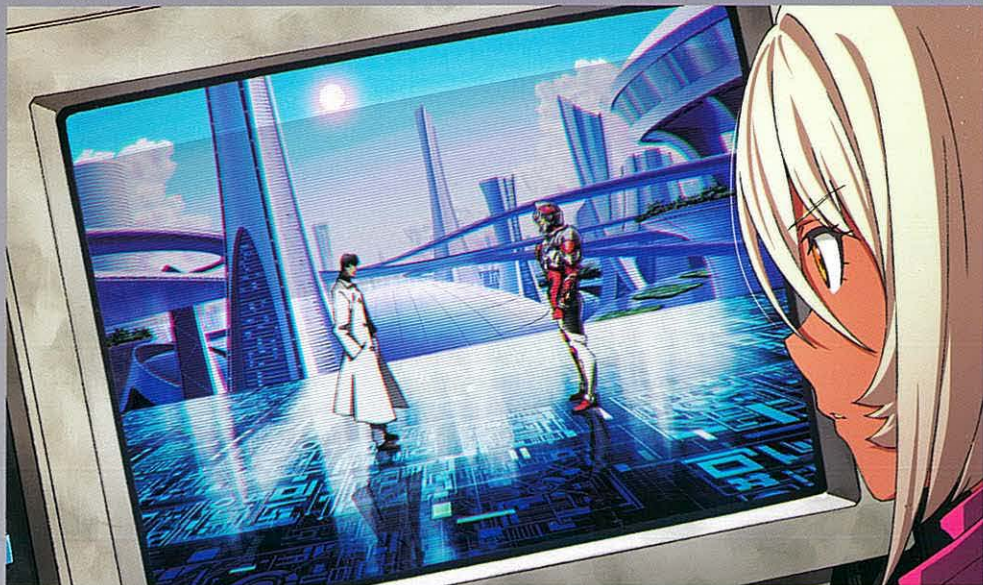
ランドマスターを目指して、グリッドスーツは廃墟の中を走り続けた。
時に、瓦礫の下で助けを求める人々を救出しながら。
そうした中でヒカリは、「自分がヒーローになる」という想いが、少しは叶ったような気がした。
それも東の間——突如、半身の焼け爛れた次元寄生獣が行く手に立ちはだかった。
ダイアウイングが墜落した際、一体だけ生き残っていたのだ。
襲い来る次元寄生獣を迎え撃つグリッドスーツ！
だが、交戦中、フリーゾーンエネルギーの残量がわずかである事を告げるアラートがグリッドスーツ内に鳴り響いた。
それでもヒカリは焦らずに、エミュレート・サンダーアックスを振り下ろし、どうにか次元寄生獣にとどめを刺した。

すると、その直後、グリッドスーツの装甲が光の粒子となって消滅し、元のパワードスーツへと戻っていた。
「すまない。エネルギーが尽きたようだ……」
「いいえ、大丈夫。もう着いた」
パワードスーツを脱いだヒカリが降り立ったのは——地表に穿たれた巨大なクレーター。
ジャイガンターとダイアクロン隊の激闘を物語る戦いの爪痕である。
そして、そのクレーターの中央部分の裂け目からは、今は閉鎖されている地下施設への入口が覗いていた——。

ヒカリはエレベーターシャフトのロープを伝って、地下施設を下へ下へと降下していった。
そして、最下層のフロアに辿り着くと、電波の発信源を目指して歩みを進めていった。
やがてヒカリは、とある区画の前で足を止めた。
「ここだ……」
その眼前にある扉には、「N2財団研究所 東京分室」のプレートが掲げられていた——。

「N2財団研究所 東京分室」——ここは遙か以前、マクロゾーン樹立の黎明期に、ランドマスターの基礎プログラミング開発が行われていた場所である。
そして今、研究所内の一角で、ヒカリは埃をかぶったインターフェイスの前に立っていた。
それは複数の機器が無造作にコンポジットされ、前時代のCRT型ディスプレイとアナログ入力式キーボードで構成された、いびつなインターフェイスシステムだった。
「これが電波の発信源……」
けれど、電源を入れてアクセスを試みるも、薄暗いディスプレイ画面には、人の形らしきブロックノイズがボワツ……と浮かぶのみであった。
「ダメだ、応答しない……この端末がランドマスターと繋がってるに違いないのに」
「ならば、私が直接、コンタクトしてみよう！」
そう言うと、グリッドマンはダイアクター内のサイバー空間を離れ、端末から伸びたケーブルに飛び込み——ケーブル内の移動空間<パスルート>を突き進んでいった。
ランドマスターが退避した地下シェルターとN2財団研究所は、ランドマスター開発当初の名残で、未だに有線ケーブルで接続されたままだった。
ランドマスターはそれを利用して、端末から電波を発信していたのだ。
そして——グリッドマンはランドマスター内のコンピュータ・ワールドへと到達した。
それと同時に、ヒカリの目の前のディスプレイ画面も明るく鮮明になり、コンピュータ・ワールドの光景が映し出された——。
ランドマスターのコンピュータ・ワールド。そこは——
光り輝くクリスタルに覆われた、メカニカルなメタルカラーの建造物が無限に建ち並ぶ都市と——
ガラス細工を思わせる草木の上を、クリスタルの小鳥が舞い飛ぶ自然が広がり——
空には水晶の雲が浮かび、宝石のように煌めく太陽からは温かい光が降り注ぐ、穏やかな世界。
そして、その一角に——クリスタルのコンソールで作業している、全身をクリスタルに覆われたメカニカルなヒューマノイドの姿があった。
「よく来てくれた……」
そう声を掛けながら、クリスタルのヒューマノイドはグリッドマンの方へと歩き出し——おもむろに胸の前で、両手を軽くクロスさせた。
するとたちまち、全身が光に包まれ——白衣を纏った精悍な青年の姿へと変わった。
「あなたが……ランドマスター？」
「ああ。今はそういう呼ばれ方もされているね」

ランドマスターはグリッドマンに話し始めた。
シェルターへ退避後、孤立状態になってしまったランドマスターであったが、小型偵察ドローンによって、地上の状況はモニターし続けていた。
そんな中、次元寄生獣と戦うグリッドスーツの姿を捉え、驚愕した。
スーツの開発データも、次元シールドを無効化する機能に関するデータも、自分のデータバンクには存在しないからだ。
しかしいずれにせよ、ジャイガンターへの対抗策として、次元シールドを攻略するためのデータを入手する必要がある。
そこで、グリッドスーツにコンタクトを試みたのだが——まさか、ハイパーエージェントなる存在が関与しているとは、さすがのランドマスターでも想定外であった。
しかも、その相手が自分に協力を求めているとは！



無論、グリッドマンはデータの提供を惜しまなかった——が、ランドマスターはすぐさま結論に至った。自分の演算処理能力をもってしても、ハイパーエージェントの次元シールド突破能力を解析し、ダイアクロンメカに搭載する事は、残念ながら不可能だ——と。けれど、自分たちの目的は一緒だ。ランドマスターは正義の志を同じくするグリッドマンに、全面的な協力を約束した。

そしてただちに、エネルギー充填装置《バイタルフラッシャー》でシェルターに備蓄されているフリーゾンエネルギーの、グリッドマンへの充電が開始された。それと同時に、コンピュータ・ワールド内のバーチャルファクトリーでは、3DCGモデリングを想起させるシステムによってアシストウェポン《バトルハンガー》の構築が始まっていた。バトルハンガー——それは、月の科学研究基地で開発中の最新メカ《ダイアパルスV1》の設計データをベースにした、グリッドマンのパワーサポートアーマーとなるアシストウェポンである。さらに、ランドマスターはグリッドマンおよび東京シティでの戦闘データを解析し、ジャイガンターの再生能力の源である次元波動振動を打ち消すための最適解を算出し始めた。そして——

「答えを導き出せたよ。《サンダークラッシュキャリバー》——それこそが、我々の求めているものだ」
 「サンダークラッシュキャリバー？」
 思わずグリッドマンは聞き返した。
 「ああ。逆波動光子を放つ事によって次元波動振動を打ち消せるアシストウェポン——さしずめ必殺武器、といったところかな」
 「必殺武器」
 その言葉に、グリッドマンとヒカりは勝利への希望の光が射したように感じた。
 「サンダークラッシュキャリバーのコアには、超電圧をかける事で固有の振動周波数を発する特殊なクオーツが必要だ。しかし……」
 「？」
 ランドマスターの重々しい口調に、グリッドマンとヒカりは不安を覚えた。
 そしてそれは、的中した。
 「そのクオーツは……地球上には存在しない」
 「！」
 希望の光はたちまち、遮られたように思えた。

「どこに……どこに行けばあるんですか、そのクオーツは!？」
 ヒカりは思わずディスプレイ画面へ身を乗り出し、詰め寄った。
 「それに相当する物があるとすれば、この太陽系では唯一……木星の第二衛星、エウロパだ」
 「木星!？」
 「そう、記録によれば以前、エウロパの巨大クレーターで、未知の領域から飛来したと思われる隕石が発見された。その隕石が含有していた水晶……『緑色に発光する水晶』ならば、我々の要求に応じてくれるだろう。だが……」
 たとえ木星・ジュピターゾーンのエウロパ基地と連絡が取れたとしても、その水晶を採取できる保証はどこにもない。それに、短時間で惑星間移動を可能にする《超速宇宙航行用フリーゾンドライブ》も未完成のため、木星から届くまでには、地球上のフリーゾンエネルギーが全てジャイガンターに食い尽くされてしまうのは想像に難くなかった。
 「エウロパ……緑に光る水晶……」
 そう眩きながら、ヒカりはハッとした表情を浮かべ、首元へと手をやり——ダイアクターの襟元から身につけているペンダントを取り出した。
 そのペンダントにはめ込まれていたのは——緑色に輝く小さな水晶の欠片!
 父のエウロパ土産であり、弟の形見でもある水晶の欠片であった。
 「カイザキ隊員、君は幸運の女神だな」
 「ああ!」

ランドマスターの言葉に、グリッドマンは力強く頷いた。
 これは運命だ。
 ヒカりを選んで間違いなかった。
 ヒカりとの出会いは、運命に導かれたものだったのだ!
 けれど、水晶の欠片は数ミリサイズであり、サンダークラッシュキャリバーへ実装するには、あまりに小さすぎた。そこでランドマスターは、ディスプレイ画面の向こうからヒカりに指令を下した。
 「カイザキ隊員、その研究所にあるスペクトル・マルチレーベで水晶の成分組成をスキャンしてくれ。そのデータを元に、私がこちらで兆速合成する!」
 「了解!!」
 ヒカりはすぐ作業に取り掛かり——
 ランドマスターはアシストウェポンの構築を進め——
 グリッドマンもフリーゾンエネルギーの充電を続けつつ、ランドマスターと協力してアシストウェポンの構築を進めた。
 そう、今ここに、ジャイガンターを倒すための作戦——その名も『グランドオメガクロス作戦』が発動したのである!

だが、時を同じくして——ジャイガンターは進撃を続けていた。最大級のフリーゾンエネルギー採掘プラントがある富士山に向かって!
 ランドマスターはアシストウェポンの構築を急ぐと同時に、偵察ドローンによってその様子もモニターしていた。そして、ジャイガンターが富士プラントのフリーゾンエネルギーをすべて吸収した場合の被害をシミュレーションするが——導き出された結論は恐るべきものだった。
 最悪の場合、ジャイガンターは、その体を構成する超波動フリーゾン量子と大量のフリーゾンエネルギーが結合する事によって、地球サイズ、いや、太陽系サイズにまで巨大化し——片や地球は、その反作用によって生み出されるブラックホールの如き超重力場によって原子サイズにまで凝縮され——最終的には消滅してしまうというのだ!

ダイアクロン富士プラント防衛大隊は、侵攻してくるジャイガンターに対しての迎撃態勢を整えつつあった。しかし、東京シティでの戦いで敗北を喫したダイアクロン首都防衛隊と同様、次元シールドの攻略方法は見出せておらず、ジャイガンターを迎え撃とうにも勝算は皆無に等しかった。その間にも、刻一刻と富士プラントへ迫っていくジャイガンター。もはや、ヒカりたちには一刻の猶予も残されていない——。

(つづく)

第4話

合・体

その名は バトルスグリッドマン!

ランドマスターによるアシストウェポンの構築も、必殺武器のコアとなるクオーツの合成も、完了までには今しばらくの時間を必要としていた。

だが、すでにジャイガンターは富士プラントを臨む市街地へと足を踏み入れていた。

「もう時間がない……ヒカリ! あらためて君に協力を要請する!」

「もちろん!」

フリーゾーンエネルギーをフルチャージしたグリッドマンは、アシストウェポンを装備できないのは覚悟の上で、ヒカリと共に出撃を決心した。

「もう一つ、頼みがある」

「えっ……」

グリッドマンの頼み——それは、実体化の際に、ヒカリのダイアクターのメモリーに保存されている、彼女と弟が思い描いた夢のヒーロー《シルバークラティオン》のイメージデータを使わせて欲しいというものだった。

「あのイメージには君の想いがこもっている。誰かを守りたいと願う強い想いが! その想いが私を……私たちの肉体を、より強靱にしてくれるはずだ!」

そして、グリッドマンはヒカリに告げた。

「アクセプターでアクセスフラッシュしてくれ!」

「アクセス…フラッシュ…わかった!やってみる!」

ヒカリが頷くと、アクセプターはそれに呼応したかの様に輝きはじめ、眩い光を放ちながら新たな形態 プライマルアクセプターへと変化した。

「アクセス フラッシャーシュ!」

そう叫びながら、構えた左手のプライマルアクセプターと右手をクロスすると——光に包まれたヒカリの体は、目の前のディスプレイ画面の中へと吸い込まれ——コンピュータ・ワールドへと転送された。

そして、次の瞬間——グリッドマンはヒカリと一体化していた。

シルバークラティオンイメージを取り込む事によって、より堅牢堅固な、新たな姿となって!

「この姿は……そうか! あなたと私は、今からヒーローになるんだ!」

一心同体となったヒカリの想いと共に、グリッドマンは移動空間パスルートへ——シェルターから遠く富士山麓まで、幾つものポイントを経由して延びている送電ケーブル内へと突入し、現場に急行した。

「頼んだぞ、グリッドマン!」

グリッドマンに希望を託しつつ、ランドマスターもまた、アシストウェポンの構築を急いだ——。

富士山麓の市街地では——幸いにも住民の避難は完了していたが、ジャイガンターの侵攻が続いていた。

しかも貪欲なジャイガンターは、最大の獲物である富士プラントを目前にしてもなお、市街地のインフラ用フリーゾーンエネルギーを搾取しようとしていた。

そして、足元に埋まるパイプラインへ向かって捕食用の触手をカメレオンの舌のようにシュッ! と伸ばした——が、その時!

「グリッドライトセイバー スラッシュ!」

突如、現れたグリッドマンが、左手に装着したプライマルアクセプターから発生させた光の刃を振り下ろし、ジャイガンターの触手を切断した!

「グガッ!?!」

ジャイガンターが驚くのも無理はない。

グリッドマンは送電ケーブルのパスルートに開かれたゲートウェイから飛び出し——ブラックホールの属性を持つジャイガンター

に対抗するため、自らも疑似ブラックホールの属性を備えた超密度体の10mに満たないサイズで——実体化したのだ。

「スパークビーム! 超電撃キョーック!」

プライマルアクセプターから放たれた光弾が——エネルギーを纏った右足から繰り出されるキックが——次元シールドを突破してジャイガンターの黒光りする外骨格を打ち砕く!

疑似ブラックホールの属性を兼ね備えたそれらの攻撃によって、ダメージを瞬時に再生できなくなり、苦悶の雄叫びを上げるジャイガンター!

さらにグリッドマンは、矢継ぎ早に技を繰り出し、ジャイガンターを足止めした。

だが、次の瞬間——怒りの咆哮を上げたジャイガンターが右足を大きく振り上げ——グリッドマンを踏み潰した!

一方、ランドマスターのコンピュータ・ワールドでは——緑色に輝くクオーツの合成と、必殺武器《サンダークラッシュキャリバー》の構築が、未だ進行中であった。

だが、その傍らでは、戦闘機型メカのモデリングが——アシストウェポン《バトルハンガー》の構築が、ついに完了しようとしていた。

それを確認したランドマスターは、胸の前で両手をクロスさせると——ダイアクターを装着した姿に変身!

そして、バトルハンガーのcockpitに乗り込むや、機体を発進させ——グリッドマンから与えられたプログラムによって開いた移動空間パスルートへと突入した!

グリッドマンはジャイガンターによって踏み潰されてしまった——かに思われたが、

「グリッドオオオオ ビーム!!」

グリッドマンを踏みつけたジャイガンターの足元から閃光がほとぼり、それによってジャイガンターの足は押し上げられ——ズーン! バランスを崩したジャイガンターの巨体が大地に倒れ込んだ。

グリッドマンは無事であり、プライマルアクセプターから必殺のグリッドビームを放ったのだ。

だが、それも束の間——フォォン! 倒れたジャイガンターが極太の尻尾を振ってグリッドマンを薙ぎ払った。

たちまちグリッドマンは岩肌叩きつけられ、さらに二発、三発とジャイガンターの容赦ない尻尾攻撃を食らった。

「ううっ……」

岩肌にめり込んだグリッドマンは身動き一つできず、その額のエネルギーランプは点滅し、エネルギー残量がわずかである事を知らせていた。

やはりジャイガンターは強敵だった。

その相手にダメージを与えるには、かなりのエネルギーを消費せざるを得なかったのだ。

そんなグリッドマンを鋭い牙で噛み砕こうと、立ち上がったジャイガンターがグワッ! と大口を開いて迫った——その時!

突如、送電ケーブルのゲートウェイから飛び出した機影がダダダッ! 機銃掃射でジャイガンターの牙を撃ち砕いた。

「!?!」

グリッドマンが見上げると、そこには——空を舞うバトルハンガーの姿があった。

「グリッドマン! 待たせてすまない」

グリッドマンやジャイガンターと同じく、多次元宇宙交差現象の副次的効果によってバトルハンガーは実体化しており、ランドマスターはホログラムとなってcockpitに搭乗していた。

そしてランドマスターは、次元シールドの発生パターンを瞬時に予測分析し、その間隙を縫ってジャイガンターへの砲撃を続けつつ、グリッドマンに呼びかけた。

「グリッドマン、強化鎧装機動・グランドオメガグロスだ!」「ああ!」

グリッドマンは力を振り絞って岩肌から抜け出すと、天高くジャンプ!

続けてバトルハンガーが滑空するグリッドマンに覆い被さる様なバラレル飛行態勢に入ると——ランドマスターがコンソールにコードを打ち込みながら叫んだ。

「アクセスコード——BATTLES GRIDMAN!」

次の瞬間、機首の小型戦闘機《ボレットファイター》が分離し——

合体モードへと移行したバトルハンガーの本体は機体を展開させ——

グリッドマンが胸の前で両腕をクロスさせると——

展開したバトルハンガーがグリッドマンの手に——足に——そして胸に——堅牢な装甲ユニットとなって次々と装着されて行き——

グリッドマンを深紅の翼を備えた鋼鉄の軍神の如き勇壮な姿へと変貌させた。

その名も——

「超神合体、バトルスグリッドマン!」



フリーゾンエネルギーで満たされたバトルハンガーと合体する事によって、一気にパワーを回復したバトルグリッドマンは、翼のブースターを噴射して宙を舞いながら、巨大なジャイガンターに対して攻撃を開始した。

「ダブルフリーゾン・ビームキャノン! バトルス・光子カッターウイング!」

両肩のキャノンから発射された光弾が——光の刃と化した翼が——ジャイガンターの外骨格を次々と粉碎していく!

その勇猛な戦いの中——バトルグリッドマンと一心同体になっているヒカリの意識は実感していた。

この超人の視点——この超人の挙動——自分自身が超人に——ヒーローなった、この感覚!

この感覚こそ、パイロットとダイアクロンメカの理想的なシンクロ状態!

つまりこれこそ、BIG-AIを完成させるために探し求めていた答えだったのだ! と。

そんなヒカリの考えを裏付けるように、バトルグリッドマンは勇猛に戦い続け、ジャイガンターを圧倒していった。

だが、劣勢だったジャイガンターが突如、その双眸を憤怒の色に染め、烈火の如き雄叫びを上げたかと思うと——その全身が脈打つように胎動し、足が——胸が——胴体が——見る見る変貌して、これまでの怪獣然とした姿から、直立した人間に近い姿へと変わっていった。

バトルグリッドマンに対抗するため、体内に溜め込んでいたフリーゾンエネルギーを開放し、より戦闘に適した《獣神モード》とでもいうべき形態へ変化したのだ。

しかも、その体から尻尾部分が分離し、大蛇の如き怪獣に——ジャイガンターβになって、獣神ジャイガンターと共にバトルグリッドマンへ襲い掛かってきた!

「!」

ポレットファイターに援護されつつ、迎え撃つバトルグリッドマン。

だが、獣神ジャイガンターの放つ次元破断光線と次元爆砕弾を雨あられと浴びて防戦一方となり——さらにジャイガンターβに巻きつかれ、動きを封じられてしまった!

「くっ!」

そんなバトルグリッドマンを嘲笑うかのように、獣神ジャイガンターは再び富士プラントへ向かって歩き出した。

それを阻止するため、動けぬバトルグリッドマンに代わり、ポレットファイターが後を追う。

バトルグリッドマンもまた、必死にジャイガンターβを振りほどこうとする——が、ギリギリギリ……さらに強く締め付けられ、全く身動きできない!

しかし、その時——一方から、また別方向から、さらに四方八方から何条ものビームが奔ってきて——不意を突かれ、次元シールドを張る暇もなかったジャイガンターβの外骨格を撃ち砕いた!

「!?!」

何事かと驚いたバトルグリッドマンが見渡すと——そこには再編されたダイアクロン首都防衛隊の姿が! 態勢を立て直し、富士山麓へと駆け付けたのだ。

「ウオオオオ〜〜〜!」

バトルグリッドマンはすかさず、締め付けを緩めたジャイガンターβを振りほどいた。

その姿に、ダイアクロン首都防衛隊の面々は目を見張った。

「あれは……月で開発中の新型か!?!」

「完成していたのか!」

グリッドマンの存在を知る由もない首都防衛隊の面々は、バトルグリッドマンをダイアバトルスの最新型モデル《ダイアバトルスV1》だと認識し、月からの援軍だと理解した。

そんな首都防衛隊に対し、怒りの矛先を向けるジャイガンターβ!

首都防衛隊は一斉攻撃で迎え撃つも、今度はジャイガンターβの次元シールドによって無効化されてしまう——かに思われたが、

「バリアー・ビィィム!」

バトルグリッドマンが放った光線によって次元シールドは相殺され、すべての攻撃が命中し、ジャイガンターβはのたうち回った。

「凄い! 敵のシールドを打ち消したぞ!」

「そこまでハイスベックなのか、ダイアバトルスV1は!」

首都防衛隊の面々が驚く中——ガッ! ガン! バトルグリッドマンは両腕に装備された万力タイプの武装《パワーバイス》でジャイガンターβを押さえ込みと——そのまま渾身の力でジャイガンターβを引き千切った!

「な……なんてパワーだ!」

首都防衛隊は、ただただ驚愕するばかりだった。

片や、本体から分離したジャイガンターβには次元波動振動による再生能力は無かった。

それでもなお、引き千切られた体で襲い掛かって来ようとするジャイガンターβを首都防衛隊に任せ——バトルグリッドマンは飛翔し、獣神ジャイガンターのもとへと急いだ!

だが、時すでに遅し!

ポレットファイターの攻撃を歯牙にもかかず——

次元シールドによってダイアクロン富士プラント防衛大隊による猛攻撃をも物ともせず——

富士プラントへと到達した獣神ジャイガンターは、貯蔵タンクのフリーゾンエネルギーを貪り食い——見る見る巨大化し始めていたではないか!

そこへ飛来するや、ただちに連続攻撃を繰り返すバトルグリッドマン!

だが、巨大化に伴い、外骨格も強化された獣神ジャイガンターには通用しない!

そればかりか、新たな頭部が二本、三本と生え、手足も同様に増殖し、より禍々しい姿となった獣神ジャイガンターが、容赦なくバトルグリッドマンに襲い掛かってきた!

このまま獣神ジャイガンターが巨大化し続ければ、地球は消滅してしまう!

絶対に負けるわけにはいかない!

「バトルスウウ グリッドオオオ ファイヤー——っ!」

胸の発光体から放たれた紅蓮の炎が、一直線に獣神ジャイガンターへと向かって行く!

と、そこへ数条のビームも加わり——紅蓮の炎と共に次元シールドを突破して、獣神ジャイガンターの外骨格にダメージを与えた!

バトルグリッドマンの奮闘を目の当たりにした富士プラント防衛大隊が、諦めずに攻撃を再開したのだ。

さらにそこへ、ジャイガンターβを倒した首都防衛隊も駆け付けた。

バトルグリッドマンは、すかさずバリアービームを放って獣神ジャイガンターの次元シールドを無効化し——ダイアクロン連合部隊と連携して総攻撃を開始!

対する獣神ジャイガンターも次元破断光線、次元爆砕弾、さらに次元波動砲を全方位に発射して猛反撃!

両者による凄まじい攻撃の応酬が繰り返され——

バトルグリッドマンとダイアクロン連合部隊は獣神ジャイガンターにダメージを負わせ続けたが——

戦いながらもフリーゾンエネルギーを吸収し続ける獣神ジャイガンターの巨大化が止む事はなかった。

だが、その渦中で——ポレットファイターのランドマスターがコンピュータ・ワールドからのシグナルを受信した。

「!」

時を同じくして、ランドマスターのコンピュータ・ワールドでは——

構築を完了したサンダークラッシュキャリバーのコア部分へ——

必要なサイズにまで合成された緑色に輝くクオーツが——
今まさに、組み込まれていた!

「グリッドマン! ついに完成したぞ!」

そう言うや、ランドマスターはコンソールにコードを打ち込みながら叫んだ。

「アクセスコード——THUNDER CRASH CALIBER!」

次の瞬間、富士プラントの送電ケーブルに開いたゲートウェイから、実体化した大剣——すなわちサンダークラッシュキャリバーが出現!

バトルスグリッドマンはサンダークラッシュキャリバーをガシッ! と手に取ると——

ブースターを全開にして獣神ジャイガンターの身の丈よりも遥か高くへ飛翔し——

背部のウイングユニットをバージして接近格闘機動モードとなり——

ウイングユニットとドッキングしたボレットファイターが見守る中——

獣神ジャイガンターに向かって、全身全霊で大剣を振り下ろした!

「ライトニング バトルス サンダーボルト——ッ!」

緑色のクオーツが輝き——

サンダークラッシュキャリバー全体が眩い緑の光に包まれ——

次元を切り裂きながら、獣神ジャイガンターの脳天に叩き込まれた!

「グギャァ〜〜ッ!」

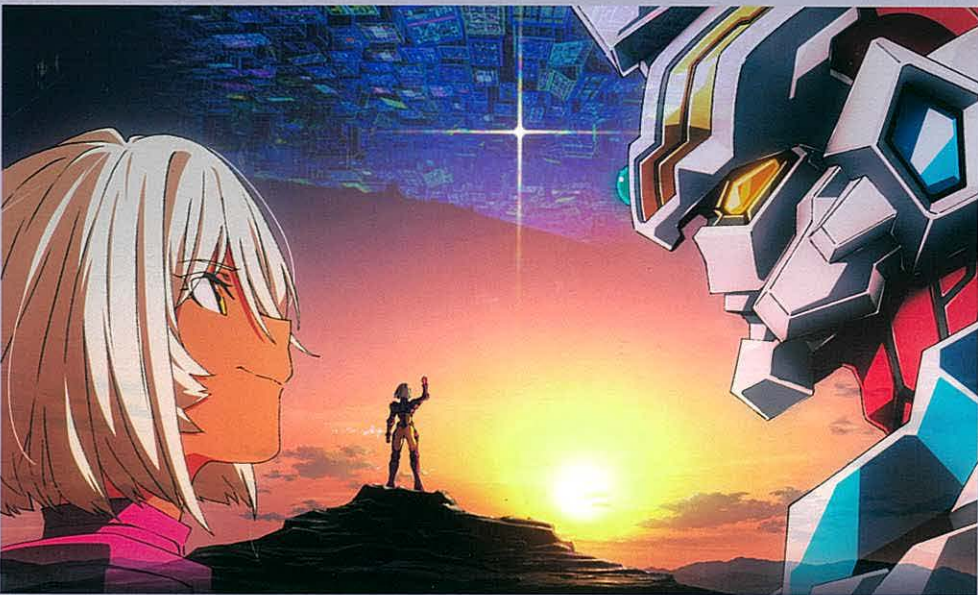
サンダークラッシュキャリバーが放つ逆波動光子によって獣神ジャイガンターの次元波動振動は打ち消され——

再生も叶わぬまま、その巨体を一刀両断された獣神ジャイガンターは天地を引き裂くような断末魔と共に大爆発!

が、次の瞬間、その爆発が一点に集束していき——獣神ジャイガンターは完全に消滅した!

そう——今ここに、グランドオメガクロス作戦は完了したのだ。

グリッドマンとダイアクロン連合部隊の決死の活躍によって!



戦いが終わり——ダイアクロン連合部隊と別れたバトルスグリッドマンは今、焼け野原となった東京シティを一望できる、郊外の山の頂に立っていた。

そして、その傍らに駐機しているボレットファイターのコックピットでは——ランドマスターがコードを音声入力しようとしていた。

「アクセスコードは——GRIDMAN!」

すると——バトルスグリッドマンの全身を覆っている装甲ユニットが、装着者であるグリッドマン自身の体へ吸収されていき——

それに伴ってグリッドマンが身に纏っていた新たな鎧も弾け飛び——

本来の赤を基調とした体躯となったグリッドマンは見る見る巨大化していき——

身長70mの巨人として実体化を果たした。

フリーゾンエネルギーの産物であるバトルハンガーを取り込む事によって、グリッドマンは本来の姿へと戻れたのだ。

そして同時に、一体化していたヒカリもまた、分離され——地表へと降り立った。

「ハイパーエージェントとして、君たちの協力に感謝する。ありがとう、ヒカリ。ありがとう、ランドマスター」

「これでもう、お別れか……」

「ああ……だが、まだやる事がある」

「えっ……」

戸惑うヒカリをよそに、グリッドマンは胸の発光体からフィクサービームを——世界を修復するための光線を放射した。

すると地球は——さらに月も——穏やかで温かい光に包まれていった。

その光の中で——ヒカリの左手首に装着されていたプライマルアクセプターは淡雪のように消えていき、ヒカリはグリッドマンとの別れの時が来たのを実感した。

そして、一抹の寂しさを覚えつつも、グリッドマンを見上げて、声をかけた。

「ありがとう、グリッドマン!」

エピローグ

月面・セレンゾーンのダイアクロン科学研究基地——。

ヒカリはBIG-AIに人間の思考パターンを学ばせるため、ダイアクターのサイバー空間にダイブしていた。

そんな彼女のいる科学研究基地は、損壊した痕跡など微塵もなく——

東京シティの人々もまた、平穏な日常を過ごしていた。

世界はグリッドマンによって修復され、一連の出来事が起こる前の状態に戻ったのだ。

それ故、ヒカリはダイアクロンメカとパイロットの最適なシンクロ状態を構築するための方法を、未だ模索中であった。

けれどそんな中、なぜかふと、自分と弟にとつての夢のヒーローである《シルバークラティオン》と共に戦う光景や——自分自身がシルバークラティオンとなって戦う姿を思い浮かべ——いつの間にか無意識のうちに、とあるアルゴリズムのパターンを思考入力していた。

すると次の瞬間、BIG-AIとの同期プログラムが最適化されたではないか!

それは——パイロットがダイアクロンメカの視点で物を見て、音を聞いて、手足を動かす感覚——そう、パイロット自らが人型戦闘マシンと一体化する感覚!

これこそ、パイロットとダイアクロンメカの理想的なシンクロ状態!

探し求めていた答えが——突然——見つかったのだ!

無論、ヒカリは知る由もなかった。

彼女が入力したのは、自らの深層意識に微かに記憶されていた、グリッドマンと一体化していた時のアルゴリズムパターンだという事を——。

そして——ヒカリは確信した。

「これで……誰もがみんな……ヒーローになれる!」

(終)